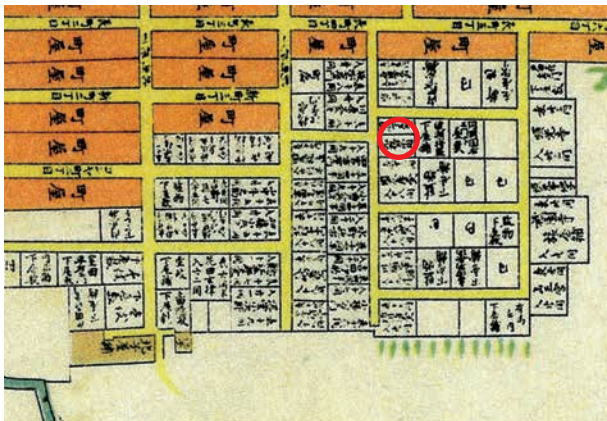


十間屋敷遺跡

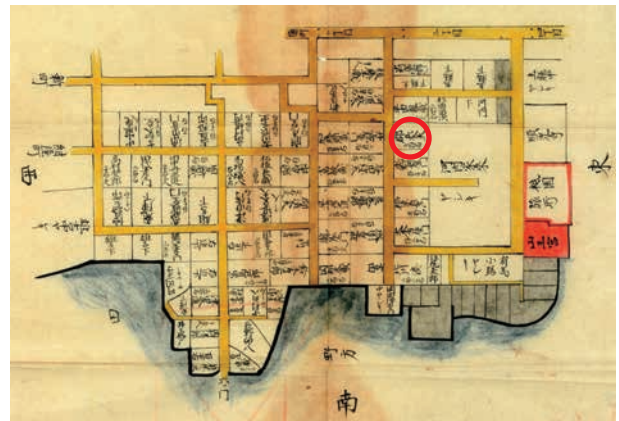
— 第4次発掘調査報告 —

Jikken-yashiki Site

— A Report of 4th Excavation —



延寶八年久留米市街図（1680年）



安政二年改舊廓図（1855年）

平成27年（2015）12月

久留米市教育委員会

序

久留米市は古くから水路・陸路の要衝としての位置を占めてきました。市内には先人達の残した文化遺産が数多く存在しており、その究明が進められております。

今回の発掘調査は、久留米城の南東に位置する日吉町の十間屋敷で実施しました。中級階層の侍屋敷を調査して屋敷地がどのように利用されたのかを垣間見ることができました。発掘調査とその成果を収録した本書の発行を通して、久留米の歴史や文化財保護に対する市民の理解に少しでも貢献できれば幸いです。

なお今回の発掘調査に際して、土地所有者の株式会社コーセーアールイーの皆様をはじめ、近隣住民の皆様にも多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

平成27年12月25日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち平成26年度に株式会社コーセーアールイー（代表取締役 諸藤敏一）の委託を受けて実施した、十間屋敷遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の西拓巳が担当した。
3. 遺構実測図の作成は西と山田治代が行い、一部を小川原励と田中樹子、藤木幸子、渡辺しげ子が補助した。遺構実測図の浄書は西が行った。なお一部の図面を除いて、浄書にはデジタルトレースを用いた。
4. 遺構写真はマミヤRB67を用いて西が撮影し、調査区東部の空中写真は（有）空中写真企画に委託して撮影した。遺物写真は、ニコンD700デジタルカメラを用いて西が撮影した。
5. 図面の方位は全て座標北を示す。基準点の座標は、国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を用いた。
6. 遺構の略記号は、SB－掘立柱建物、SD－溝状遺構、SE－井戸、SK－土坑、SP・P－柱穴・ピット、SX－不明遺構を意味する。
7. 土層の土色は『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、平成9年）に拠った。
9. 本文と出土遺物観察表、写真図版の遺物番号は全て同一である。
10. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
11. 本調査の略記号はLKJ－004、調査番号は201411である。
13. 本文の執筆は西が行い、出土遺物観察表は専任非常勤職員の古賀和子が作成したものに西が追記した。本書の編集は西が行った。
12. 表紙図版は絵図の抜粋である。また、赤丸は本調査地点の位置を示す。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	21
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図 調査地点の位置と周辺地形 (1/2,500)	3
第3図 調査区北西壁面土層図 (1/40)	4
第4図 十間屋敷第4次調査遺構配置図 (1/150)	5
第5図 調査区西部上層全景 (南上空から)	5
第6図 調査区西部下層全景 (南上空から)	5
第7図 調査区東部全景 (南上空から)	6
第8図 S B 54実測図 (1/80)	6
第9図 S B 55実測図 (1/80)	7
第10図 S K 50土層図 (1/30)	8
第11図 S K 50完掘状況 (南西から)	8
第12図 S K 51土層図 (1/20)	8
第13図 S K 51完掘状況 (北東から)	8
第14図 S D 21土層図 (1/40)	9
第15図 S D 21掘り下げ状況 (北東から)	9
第16図 S D 35断面図 (1/20)	9
第17図 S D 41掘り下げ状況 (北東から)	9
第18図 S D 41土層図 (1/40)	10
第19図 S E 39半裁状況 (北東から)	10
第20図 S E 39断面図 (1/30)	10
第21図 S K 2土層図 (1/40)	11
第22図 S K 2掘り下げ状況 (南東から)	11
第23図 S K 3土層 (北東から)	11
第24図 S K 3・17実測図 (1/40)	12
第25図 S K 17掘り下げ状況 (北東から)	13
第26図 S K 20完掘状況 (北西から)	13

第27図	S K20実測図 (1/40)	13
第28図	S K40東部掘り下げ状況 (北西から)	13
第29図	S K40・85実測図 (1/40)	14
第30図	S K44実測図 (1/40)	14
第31図	S X30 P 1 土層 (北西から)	15
第32図	S X30 P 2 土層 (北西から)	15
第33図	S X30土層図 (1/40)	15
第34図	出土遺物写真 1	18
第35図	出土遺物写真 2	19
第36図	出土遺物写真 3	20
第37図	出土遺物写真 4	21

表 目 次

第 1 表	出土遺物観察表 1	16
第 2 表	出土遺物観察表 2	17



▲調査区上空より南東方向を望む。左奥の瓦屋根が順光寺。右奥の林が日吉神社 (旧 山王宮)

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成26年6月9日、土地所有者の株式会社コーセーアールイー（代表取締役 諸藤 敏一）から、久留米市日吉町74-1、74-2における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は久留米城下の武家屋敷地であり、周知の埋蔵文化財包蔵地でもある十間屋敷遺跡の中央部にあたる。6月28日の試掘調査で遺構を確認したため、7月1日に発掘調査が必要である旨を回答した。9月24日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、土地所有者と久留米市長橋原利則は、9月25日付で十間屋敷遺跡第4次調査の協定書と委託契約を取り交わした。現地での発掘調査は当初10月2日から始める予定だったが、既存建物の解体に時間がかかったことから、10月14日に着手して、12月11日に終了した。遺物整理と報告書作成は、平成26年12月1日から平成27年12月25日の間に行った。調査面積は231㎡である。

2. 調査の体制

調査主体：久留米市教育委員会

調査総括：市民文化部文化財保護課

教 育 長：堤 正則

部 長：野田 秀樹

次 長：竹村 政高

課 長：園井 正隆

課長補佐：宮崎 俊一（平成26年度）

山崎万里子（平成27年度）

課長補佐兼主査：白木 守

主 査：水原 道範（平成27年度）

事務主査：塚本 映子

豊福 早苗（平成27年度）

庶務担当：豊福 早苗（平成26年度）

調査担当：西 拓巳

整理担当：古賀 和子（専任非常勤職員）

丸山裕見子（専任非常勤職員）

発掘調査臨時職員（平成26年度）

大坪 進、國武 三歳、高尾 春代、田中 樹子、堤 淳子、橋原 初美、藤木 幸子
二村 智治、丸山 幸、迎 直樹、森山美千代、柳 鈴子、山田 治代、由布 幸子
渡辺しげ子、渡辺やつ子

発掘調査整理臨時職員（平成26年度）

石崎 玲子、中富美智子、山元 博子

3. 調査の目的と経過

今回の調査は、江戸時代の侍屋敷の遺構を把握することを目的に実施した。なお、排土置き場と駐車場を確保するため、調査区は東西で分けた。平成26年10月14日、重機で調査区東部の表土を剥いだ後に遺構検出を行い、遺構の掘り下げを開始した。遺構の掘り下げと並行して、実測や写真撮影などの記録を行い、11月8日に気球を用いて東部全景の空撮を行った。11月10日から、重機で井戸の半裁を行いつつ、調査区の反転を開始した。11月13日に調査区西部の表土剥ぎを完了し、翌11月14日に西部上層の遺構検出を行った。その後、西部上層の遺構掘り下げ、実測、写真撮影を実施し、11月26日に西部上層の全景写真を高所作業車で撮影した。撮影後、包含層の掘削と西部下層の遺構検出と掘り下げ、実測、撮影を実施し、12月3日に西部下層の全景写真を高所作業車で撮影した。埋め戻しは12月8日から開始して、12月10日に完了。翌12月11日の機材撤収をもって、現地での発掘調査を終えた。

遺構配置図はトータルステーションを用いて作成し、測量データは株式会社CUBIC製の「遺構くんCubic」で編集・保存して、浄書も行った。ただし、土層と井戸の断面は手測り（1/20、1/10）で記録した。記録写真は、モノクローム・カラーリバーサルともに6×7判で撮影した。

Ⅱ. 位置と環境

久留米市は筑紫平野の中心部、筑後川の中流域に位置する。筑紫平野を流れる筑後川は、宝満川と合流して流れを南西へと変える。その左岸には、筒川やおこん川に面して半島状の低位段丘が形成される。十間屋敷遺跡は低位段丘のほぼ中央に位置し、第4次調査地点は標高約11mに立地する。

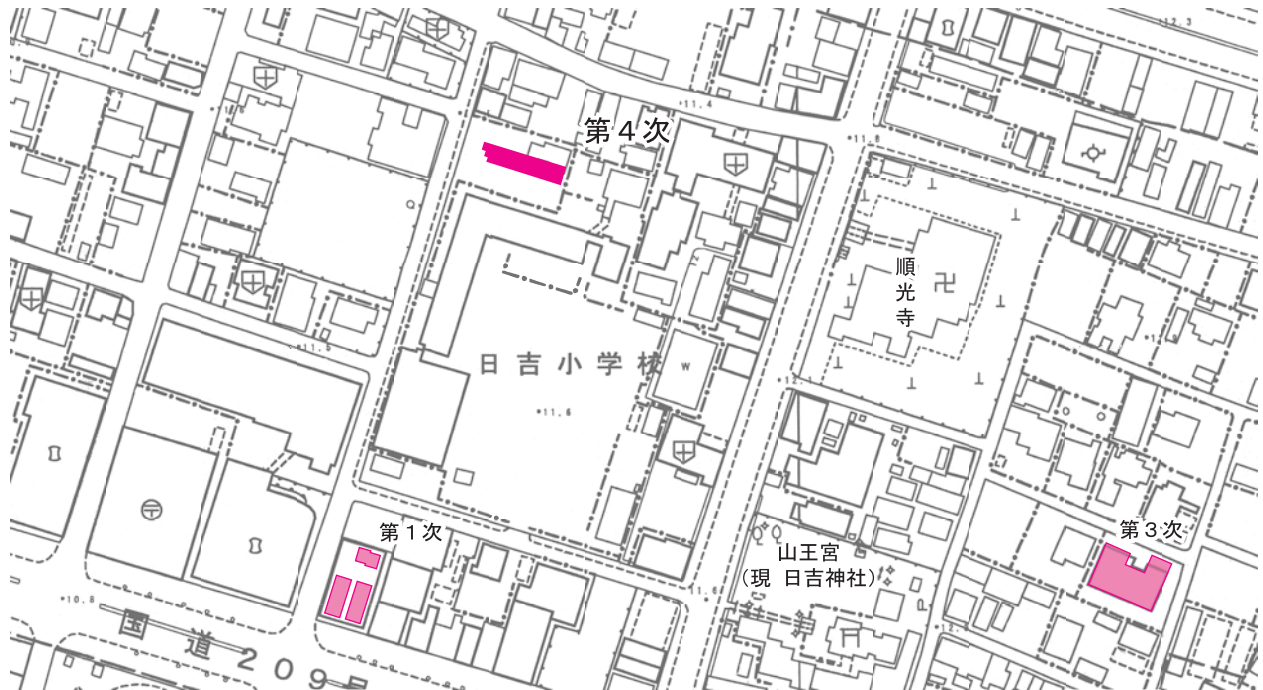


遺 跡 名

1. 十間屋敷遺跡 第4次調査地点

2. 久留米城本丸跡
3. 久留米城二ノ丸跡
4. 久留米城三ノ丸跡
5. 久留米城外郭遺跡
6. 京隈侍屋敷遺跡
7. 櫛原侍屋敷遺跡
8. 鉄砲小路遺跡
9. 十間屋敷遺跡
10. 寺町
11. 庄島侍屋敷遺跡
12. 久留米城下町遺跡
13. 南薫西遺跡
14. 辻遺跡
15. 石丸遺跡
16. 東櫛原今寺遺跡
17. 日輪寺古墳

第1図 周辺遺跡分布図（1/25,000）



第2図 調査地点の位置と周辺地形 (1/2,500)

周辺では、久留米城外郭遺跡で旧石器時代のナイフ形石器が出土し、南薫西遺跡で縄文時代のものと思われる落とし穴遺構が検出されている。弥生時代には、櫛原侍屋敷遺跡や久留米城外郭遺跡、京隈侍屋敷遺跡、辻遺跡、石丸遺跡で甕棺墓がみられ、低位段丘北端に墓域が営まれる様子が窺える。また、東櫛原今寺遺跡の竪穴建物や辻遺跡の掘立柱建物は、集落が点在したことを示している。

日輪寺古墳は6世紀初頭に築かれた前方後円墳であり、横穴式石室の石障には線刻による装飾が施されている。京隈侍屋敷遺跡では6世紀後半～7世紀の溝や土坑が検出されており、日輪寺古墳周辺の集落の存在が示唆される。南薫西遺跡では正方位に建つ掘立柱建物群が見つかり、多数の瓦や刻書土器、墨書土器が出土していることから、『和名類聚抄』に登場する節原郷の中心集落であった可能性がある。中世の遺構としては、辻遺跡の土坑墓や13世紀後半～14世紀前半の溝、櫛原侍屋敷遺跡や京隈侍屋敷遺跡の15～16世紀にかけての溝や井戸、土坑などがある。これらの遺構に加えて、日輪寺の応永22年(1415)銘地藏板碑や、寺町に残る14世紀末～16世紀前半にかけての地藏板碑と六地藏石塔から、中世に集落があったことが窺われる。

現在久留米城がある場所に城郭が築かれたのは16世紀頃とされており、高良座主の麟圭が居城したと伝えられる。天正15年(1587)、豊臣秀吉の九州国割に伴い小早川秀包が久留米城に入城した。秀包はキリシタン教会を建てるなど城下の整備を行ったが、関ヶ原の戦いで西軍に属したために領地を没収され、慶長6年(1601)、新たに田中吉政が筑後国に入国した。元和6年(1620)、二代忠政が無嫡子のまま死去して田中氏は改易となり、翌元和7年(1621)、有馬豊氏が筑後国北半に入った。豊氏は城を改築すると共に、城下の整備に着手した。十間屋敷はこの整備の際に建設され、『石原家記』享保12年(1727)の記述や十間屋敷遺跡第2次調査の屋敷溝から、18世紀前半に順光寺や山王宮東側の空閑地と、隣接する紺屋町二丁目の町屋を編入して拡張されたと推測される。

Ⅲ. 調査の記録

1. 基本層序

本調査地点は調査着手時点で更地となっていたが、以前は対象地の西半分を駐車場が占め、東半分には民家が建っていた。土層の残存状況が最も良好だった調査区北西部の壁面（第3図）では、地表下0.2mを表土（1層）が覆い、その直下に栗石（3～4層）を伴う幕末以降の遺構面が見られる。この下層に、褐色系の江戸時代の包含層（5～12層）が幾重にも堆積しており、地表下0.4～0.5mで17世紀後半の遺構面（上層）に到達する。この遺構面直下には、包含層（17～19層）が0.15～0.2m堆積しており、灰白色の間層（24層）を一部挟み、地表下0.45～0.58m、標高11.3～11.4mで地山面に至る。調査区東部では、0.1mの表土の下に民家を取り壊した際の埋土が0.95m堆積しており、その直下の地山面で遺構を検出した。従って、調査区東部の遺構も下層の遺構として図示したが、出土遺物の年代から、調査区東部の遺構の大半が上層の遺構であった可能性が高い。地山は、標高10.7～11.0mより上層ではにぶい褐色粘質土、下層は浅黄褐色粘質土である。

2. 検出遺構

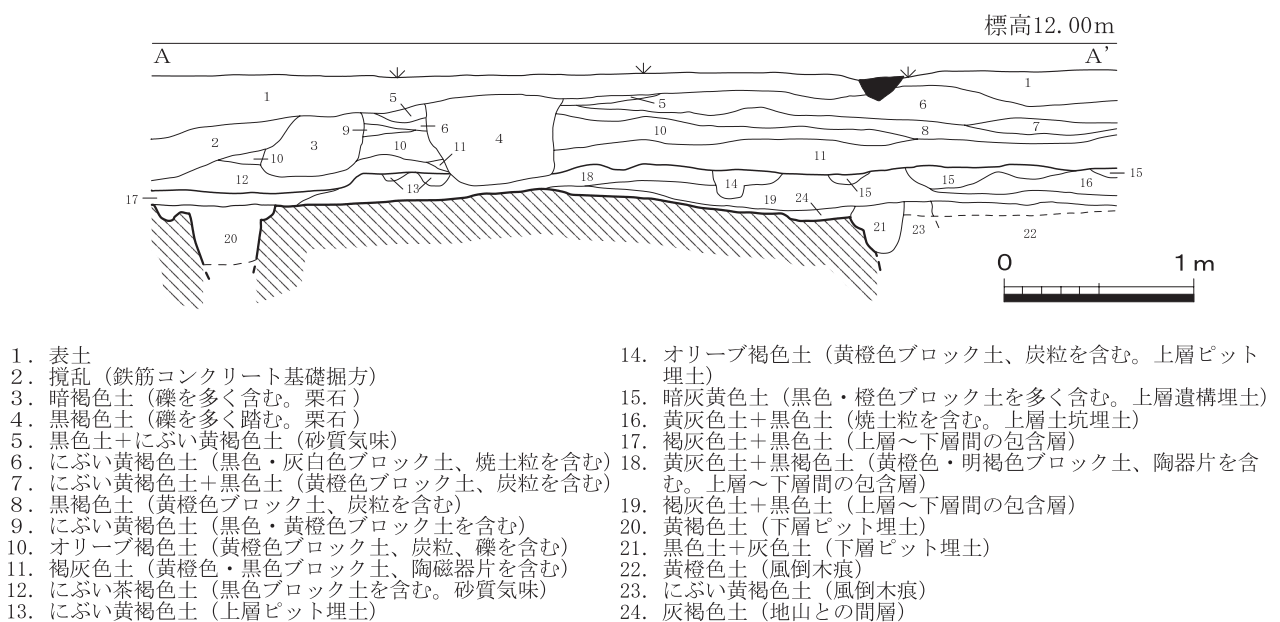
遺構密度は高いが、調査区の西端は既存の鉄筋コンクリート基礎の掘方に伴い大きく削平されており、北東隅にも既存民家による攪乱があった。主な遺構として、近世の掘立柱建物2棟、溝3条、井戸1基、土坑11基、年代や用途が明らかでない遺構1基を検出した。

上層の遺構

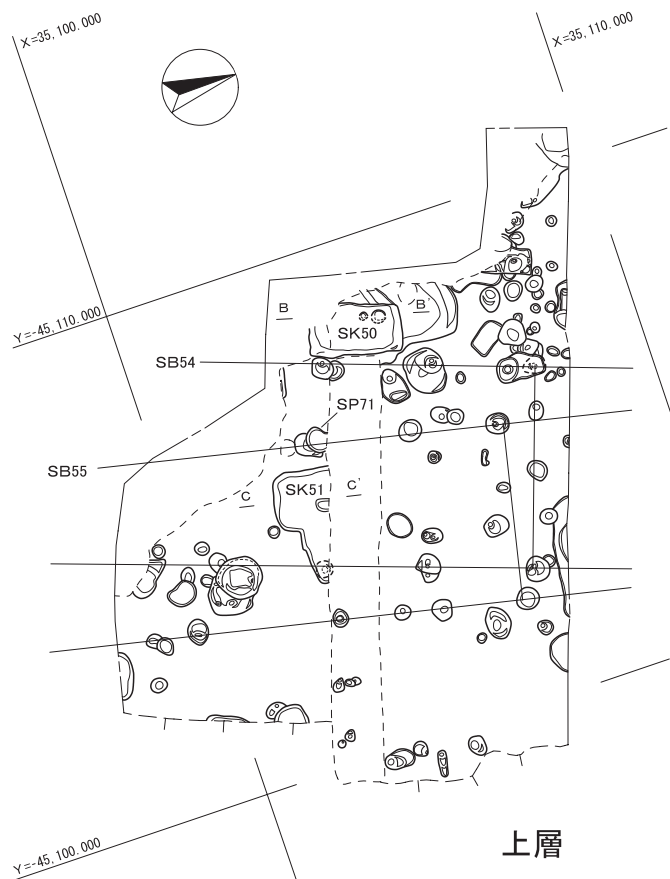
掘立柱建物

S B54（第4～5・8図）

調査区西側で検出した掘立柱建物で、主軸は19° 東に振れる。調査区内で検出したのは南北3間・



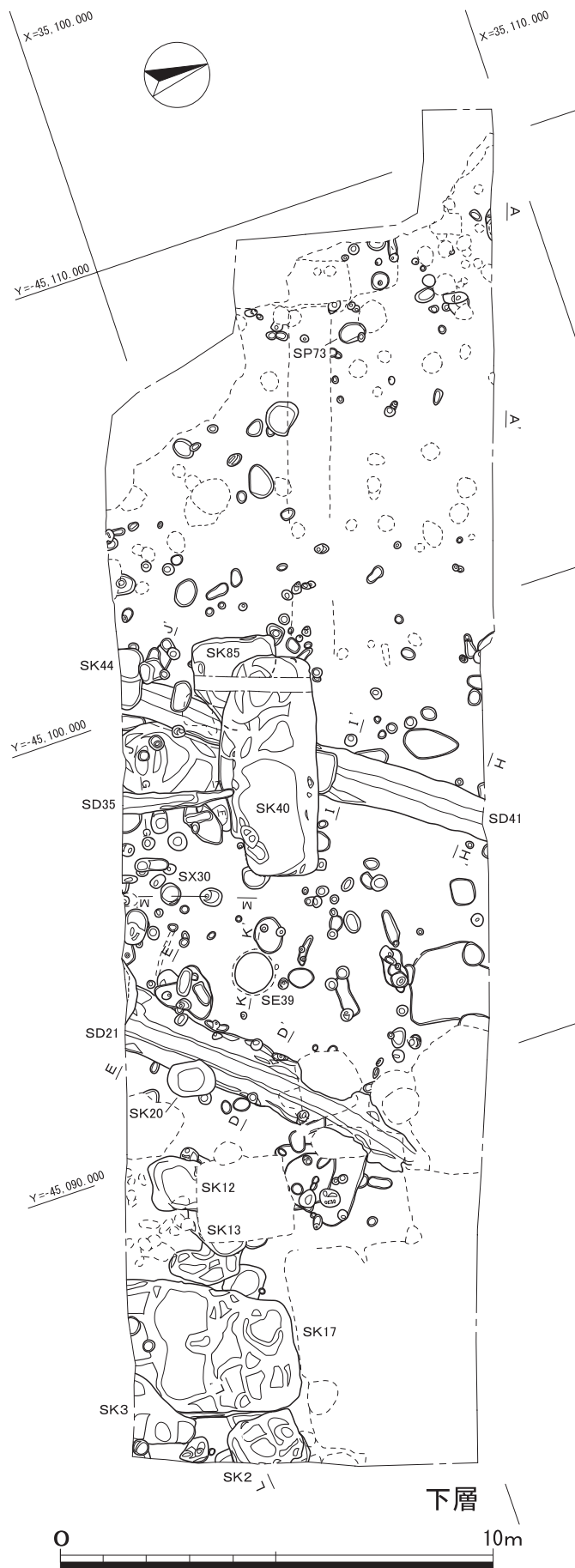
第3図 調査区北西壁面土層図（1/40）



第5図 調査区西部上層全景（南上空から）



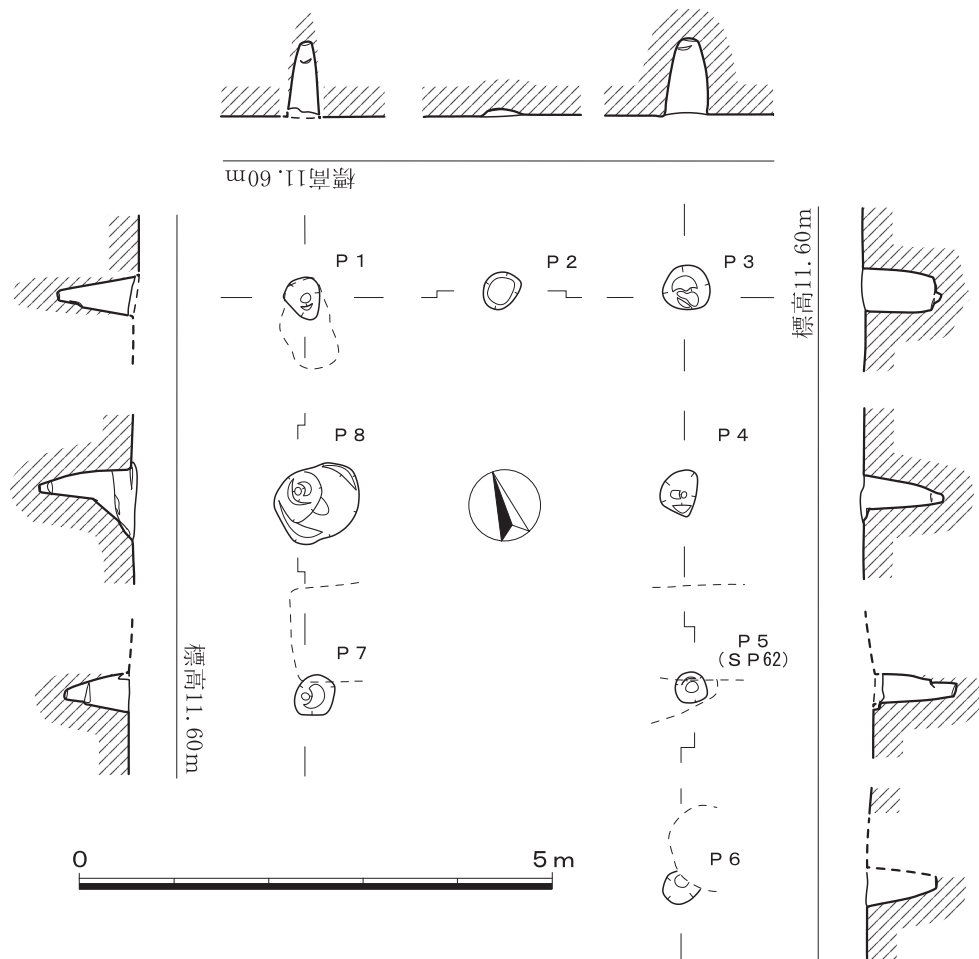
第6図 調査区西部下層全景（南上空から）



第4図 十間屋敷第4次調査遺構配置図（1/150）



第7図 調査区東部全景（南上空から）



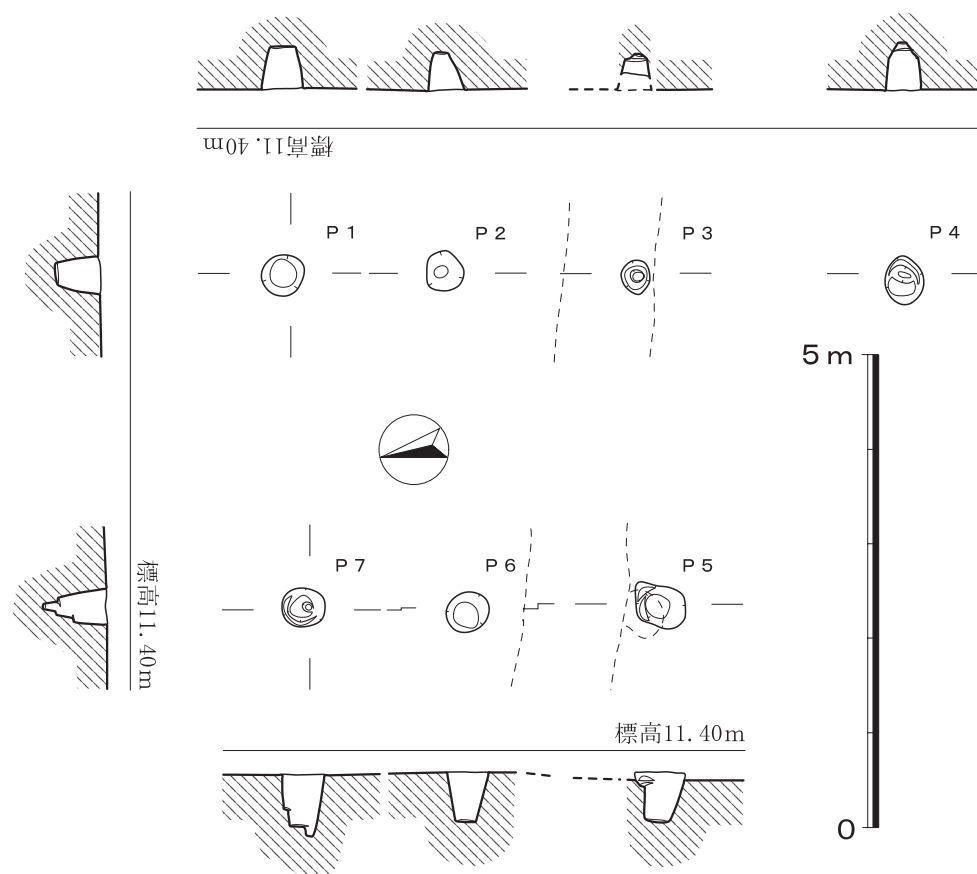
第8図 SB54実測図 (1/80)

東西2間のみだが、調査区外の南北方向および西側へ広がる可能性がある。柱穴は、いくつかのピットに先行しており、下層のSP73などに後出する。柱間の距離は、梁行が1.33～1.78m、桁行が1.48～1.74mを測る。柱穴の直径は、0.32～0.97mと定まらない。深さは0.68～0.98mだが、梁

行中央のP 2のみ深さが8 cmにすぎない。そのため、梁を支える簡易な柱が立っていたか、仮に建物が北に延びるのであれば間仕切りの柱だったとも推定される。遺物は、近世の陶磁器が出土した。P 5（S P 62）から出土した陶磁器の年代は、いずれも17世紀に収まる。

S B 55（第4～5・9図）

調査区西部で検出した掘立柱建物で、主軸は2.5° 東に振れる。調査区内で検出したのは南北3間・東西1間のみだが、調査区外の南北方向と西側へ広がる可能性がある。先行する遺構は無く、栗石S P 71がP 5に後出する。柱間の距離は、梁行が1.27～2.48m、桁行が3.09mを測る。柱穴は、直径が0.29～0.62m、深さが0.25～0.67mを測る。遺物は、端反の鉄釉陶器碗の破片や灯明皿、甕の細片、鉄釘が出土したのみである。

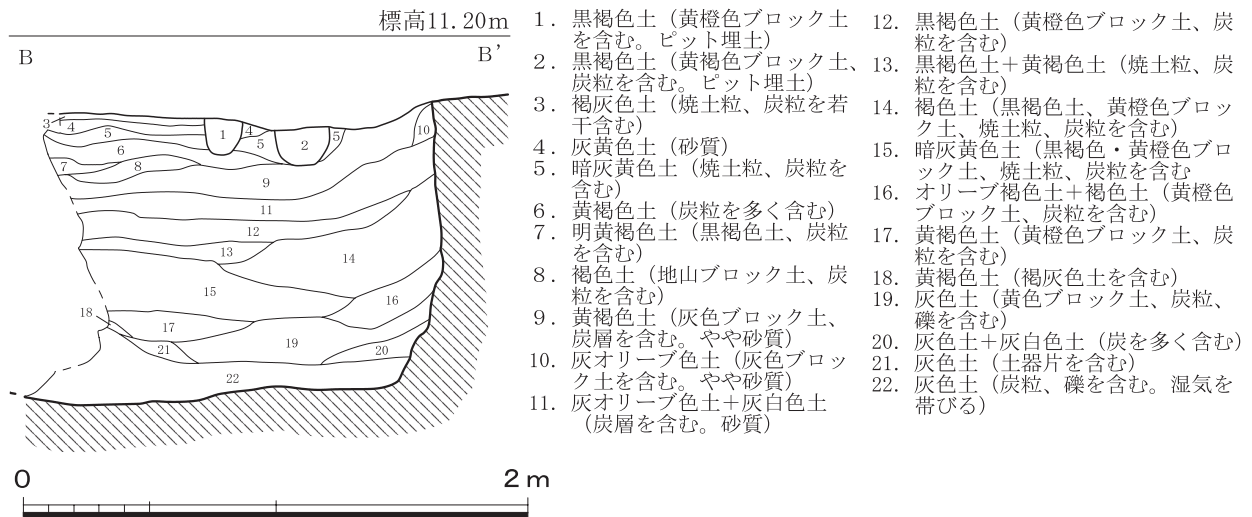


第9図 S B 55実測図（1/80）

土坑

S K 50（第4～5・10～11図）

調査区西端で検出した土坑である。複数のピットとコンクリート基礎の掘方が後出する。長軸1.85m、短軸1.03m、深さは最大1.12mを測る。埋土は第10図のとおりで、土層の上半分は炭粒や焼土粒を含む砂質土が何層も堆積し、下半分には黄橙色ブロックや炭粒を含む土壌が堆積する。遺物は近世陶磁器や土師器、煙管などの銅製品が出土した。遺物の年代は17世紀に収まる。



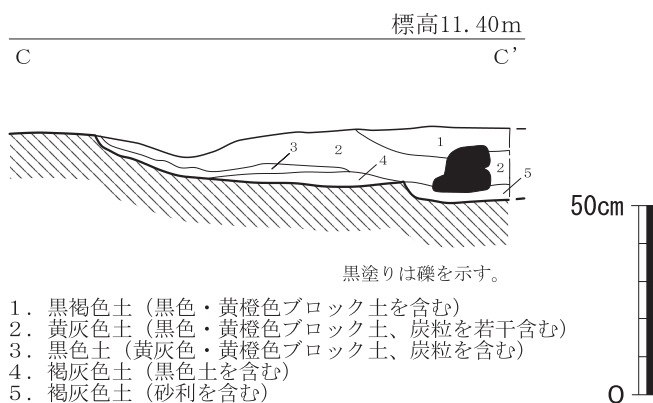
第10図 SK50土層図（1/30）

SK51（第4～5・12～13図）

調査区西部で検出した土坑である。北側を試堀トレンチに削平されるが、長軸長2.3m、短軸長0.35m以上で最大0.55m、深さ0.19mを測る。ピットに先行し、SB60P5（SP62）に後出する。埋土は第12図のとおりで、炭粒を含む。遺物は、近世陶磁器や土師器、雁首などの銅製品、凸レンズ状に膨らむ軽石製品が出土した。染付碗の年代は17世紀前半に収まる。



第11図 SK50完掘状況（南西から）



第12図 SK51土層図（1/20）



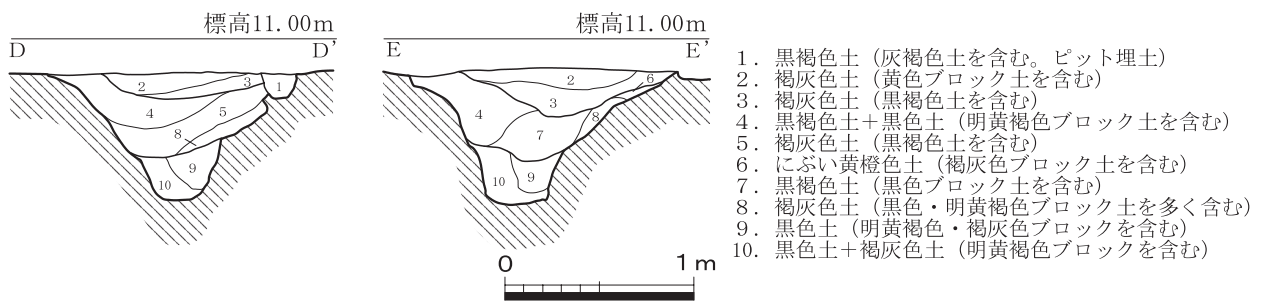
第13図 SK51完掘状況（北東から）

下層の遺構

溝状遺構

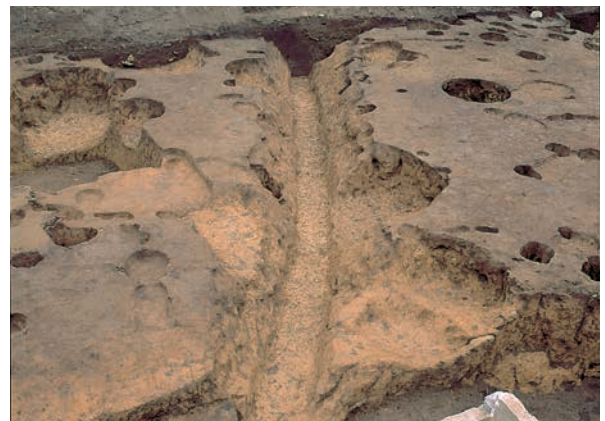
SD21（第4・7・14～15図）

調査区東部で検出した溝である。南端は調査区外に及び、北端は攪乱に削平されている。長さ7.35m以上、最大幅1.32mを測り、深さは最大で0.68mである。走行方向は、座標北に対して40° 東



第14図 SD21土層図（1/40）

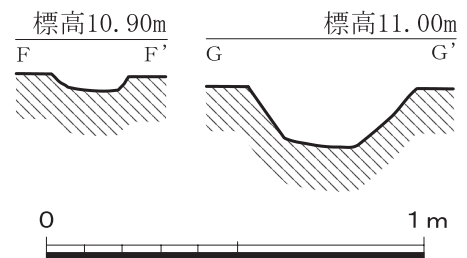
に振れ、緩やかにカーブを描く。先行する遺構は無く、S K20や近代以降の攪乱が後出する。土層から、2回掘り直しがあったことが窺える。埋土は黒褐色と灰褐色を主とした粘質土で、下層の第9・10層では粘質が強まる。遺物は、染付の皿や細片、土師質の細片が出土した。染付皿の年代や後出するS K20の年代から、18世紀後半に掘削されて、19世紀初頭までに埋没したと推定できる。



第15図 SD21掘り下げ状況（北東から）

SD35（第4・7・16図）

調査区中央部南側で検出した南北方向の溝である。北側はS K40に後出し、南側は調査区外へ及ぶ。長さ2.6m以上、最大幅0.5mを測る。深さは最大で0.32mで、南へ向かうにつれて深くなる。主軸は、座標北に対して10° 東に振れる。埋土は、黄褐色土を含む暗褐色土である。遺物は、染付の紅皿や小石原系の陶磁器碗などの陶磁器や土師器の細片、鉄片が出土した。紅皿や陶磁器碗の年代から、遺構の年代は18世紀末から19世紀前半と推定される。



第16図 SD35断面図（1/20）

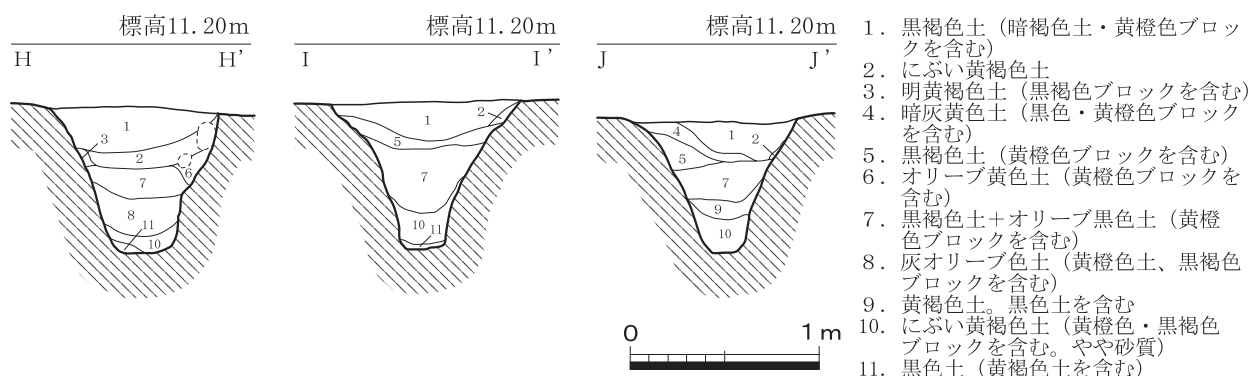
SD41（第4・7・17～18図）

調査区中央を走る溝である。両端は調査区外へ延び、長さ9.15m以上、最大幅1.17m、深さは最大で0.8mを測る。主軸は、座標北に対して38° 東に振れる。中央でS K40が後出して途切れて、調査区南壁ではS K44が後出する。埋土は第18図のとおりで、褐色系の土壌が占める。

遺物は全く出土しなかった。後出するS K40・44の年代から、少なくとも17世紀後半までには埋没したと推測される。



第17図 SD41掘り下げ状況（北東から）



第18図 S D41土層図（1/40）

井戸

S E 39（第4・7・19～20図）

調査区中央で検出した、ほぼ円形の開口部を有する井戸である。単独で検出した。開口部の直径は0.92mを測る。当初、深さ1.38mまで掘削したが床面に達しなかったため、調査区東部を埋め戻す際に半裁を試みた。遺構面からはほぼ垂直に掘削されており、深さ約1.15mから壁面が波打つ傾向が見られた。埋土は、遺構面から約0.6mまでは灰褐色土で、その下に黒色土が約0.7m堆積する。それより下の土層は第22図のとおりである。

遺物は近世陶磁器や土師器、人形といった土製品、鉄釘、銅線、炭化材、被熱した壁材などが出土した。出土遺物はいずれも細片ばかりだが、陶磁器の文様や色調は18世紀に収まる。

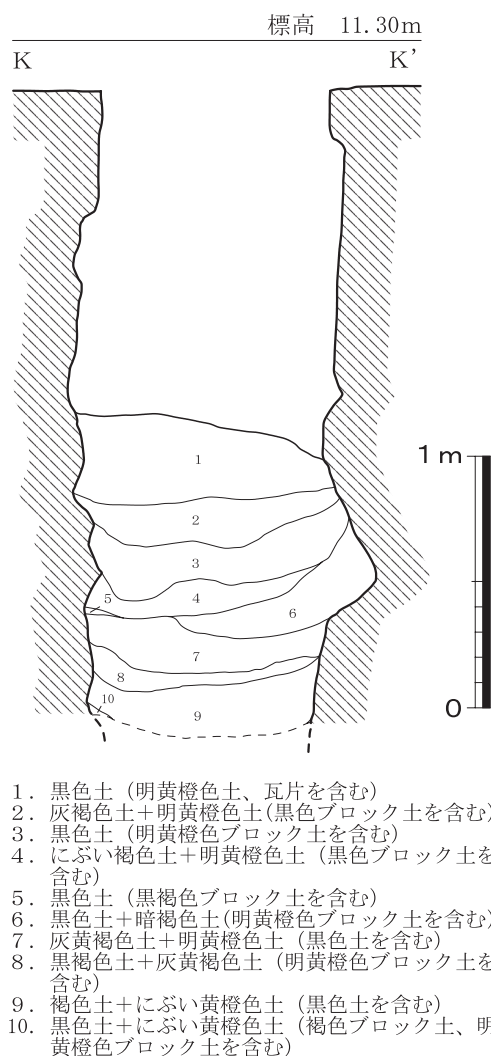


第19図 S E 39半裁状況（北東から）

土坑

S K 2（第4・7・21～22図）

調査区東端で検出した隅丸方形の土坑である。南東隅は調査区外に延びるが、長軸1.72m、短軸



第20図 S E 39断面図（1/30）

1.26m以上、深さ0.84mを測る。主軸は、座標北から6°西に振れる。埋土は第21図のとおりで、褐色土を中心に明黄褐色土や灰色土が堆積する。埋土には、炭粒が多く含まれていた。

遺物は、近世陶磁器や土師器、瓦質土器、鉄片、炭化材、瓦の破片が出土した。染付の筒型碗や碗蓋、七輪のサナ、坂東寺焼の白焼の破片など、18世紀末～19世紀初頭にかけての遺物が多く見られる。また、出土した瓦はいずれも被熱していた。

SK3（第4・7・23～24図）

調査区南東側で検出した、不整形の土坑である。南側は調査区外に延びるが、南北長1.43m、東西幅1.88mのみ検出した。深さは最大で1.28mを測る。ピットに先行して、SK17に後出する。埋土は第24図のとおりで、1回の掘り直しがみられる。

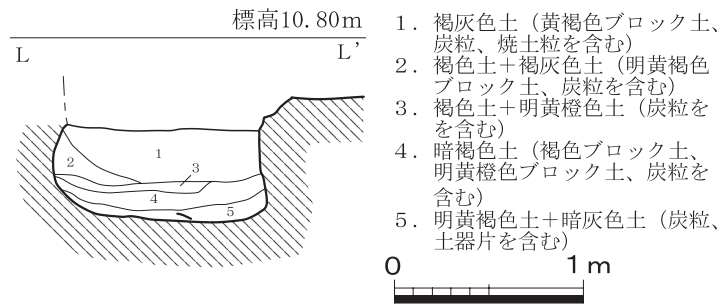
遺物は近世陶磁器や土師器、瓦、金属製品、炭化材が出土した。遺物は中層の褐灰色土層で多く出土しており、出土した瓦は全て被熱していた。染付・色絵の筒型碗が出土しており、後出するピットから19世紀前半の染付碗蓋が出土した。さらに先行するSK17の年代から、19世紀前半に埋没したと推測される。

SK12（第4・7図）

調査区南東側で検出した土坑である。北側を近代以降の攪乱に削平されており、長軸は1.25mのみ残る。短軸は1.27m、深さは0.71mを測る。主軸は座標北に対して19°東に振れる。遺物は近世以降の陶磁器や土師器、瓦片、鉄製品が出土した。出土した紅皿の年代から、19世紀中ごろ以降に埋没したと考えられる。

SK13（第4・7図）

調査区南東側で検出した土坑である。遺構の大部分が攪乱やSK12に削平されており、長軸1.57m、短軸0.69mのみ残存する。深さは0.37mを測る。遺物は近世の陶磁器や土師器であり、年代は18世紀前半に収まる。



第21図 SK2土層図（1/40）



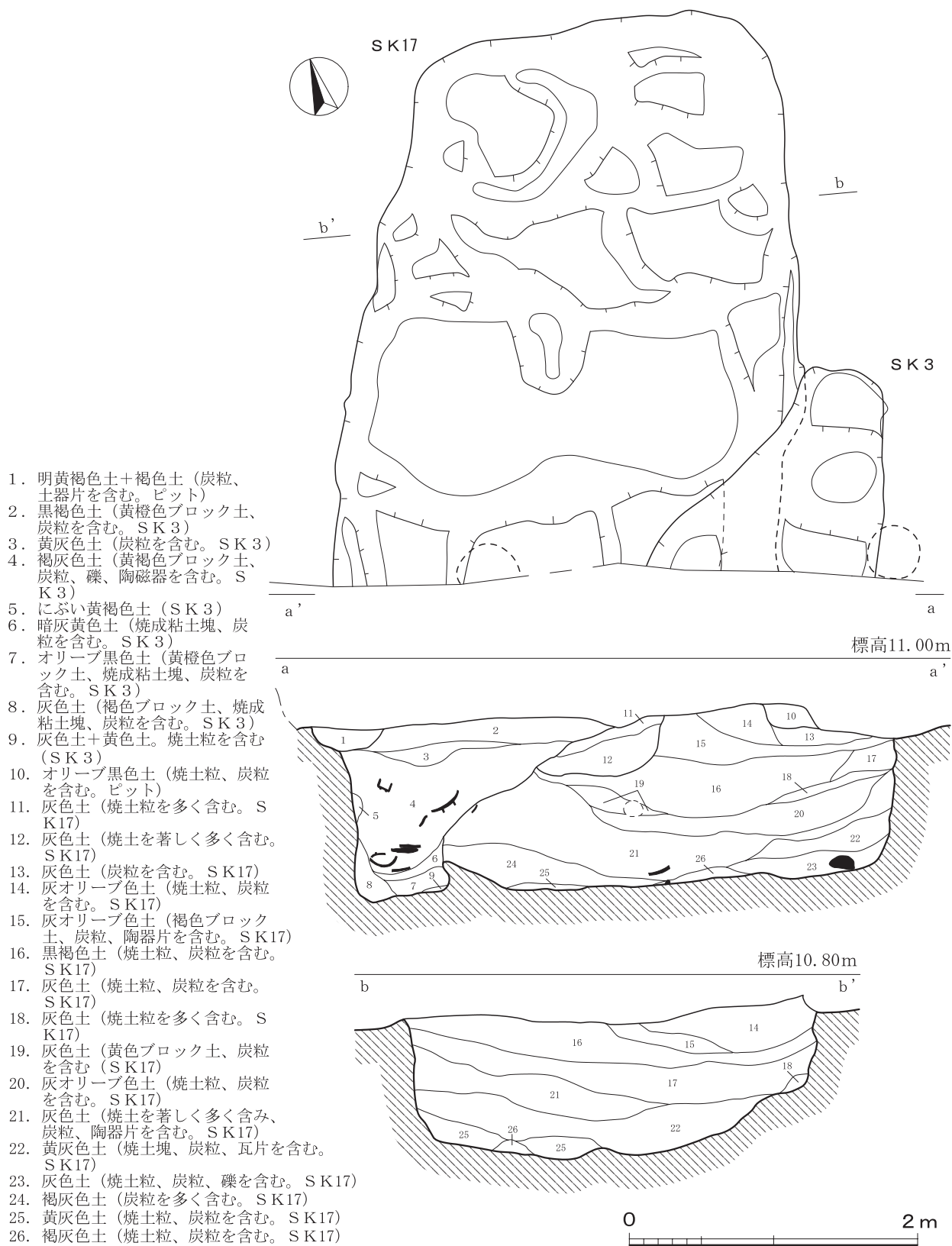
第22図 SK2掘り下げ状況（南東から）



第23図 SK3土層（北東から）

SK17 (第4・7・24～25図)

調査区南東壁際で検出した土坑である。南側は調査区外へ続き、東側はSK3が後出する。その



第24図 SK3・17実測図 (1/40)

ため、検出したのは長軸3.90m、短軸2.94mのみである。深さは最大で1.30mを測る。主軸は、座標北から22° 東に振れる。埋土は第24図のとおりで、焼土や炭を多く含み、火災後の廃棄土坑であることが想定される。出土した近世陶磁器や土師器、瓦、金属製品、石製品、壁材にも被熱で変色したり、煤が付着したものが多くみられた。遺物の年代は、18世紀～19世紀初頭に収まる。



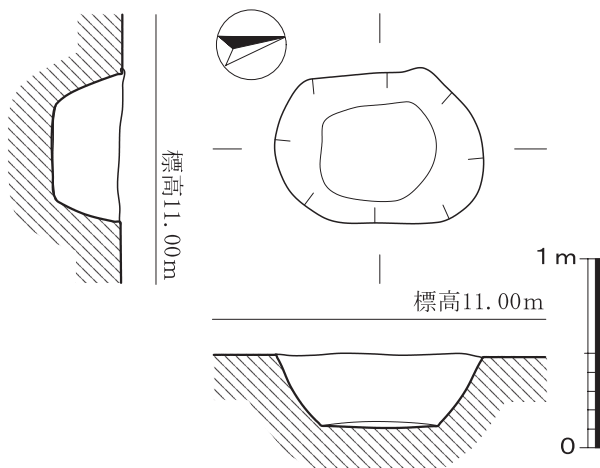
第25図 SK17掘り下げ状況（北東から）

SK20（第4・7・26～27図）

調査区中央南側で検出した、小判形に近い平面形を有する土坑である。主軸は座標北に対して14° 東に振れる。長軸1.09m、短軸0.78m、深さ0.39mを測る。先行する遺構は無く、SD21に後出する。埋土は、炭・焼土粒・明黄褐色ブロックを含む灰褐色土であった。遺物は、陶磁器や土師器の細片、鉄釘、被熱した壁材や石が出土した。出土遺物やSD21の年代から、19世紀前半の廃棄土坑と考えられる。



第26図 SK20完掘状況（北西から）



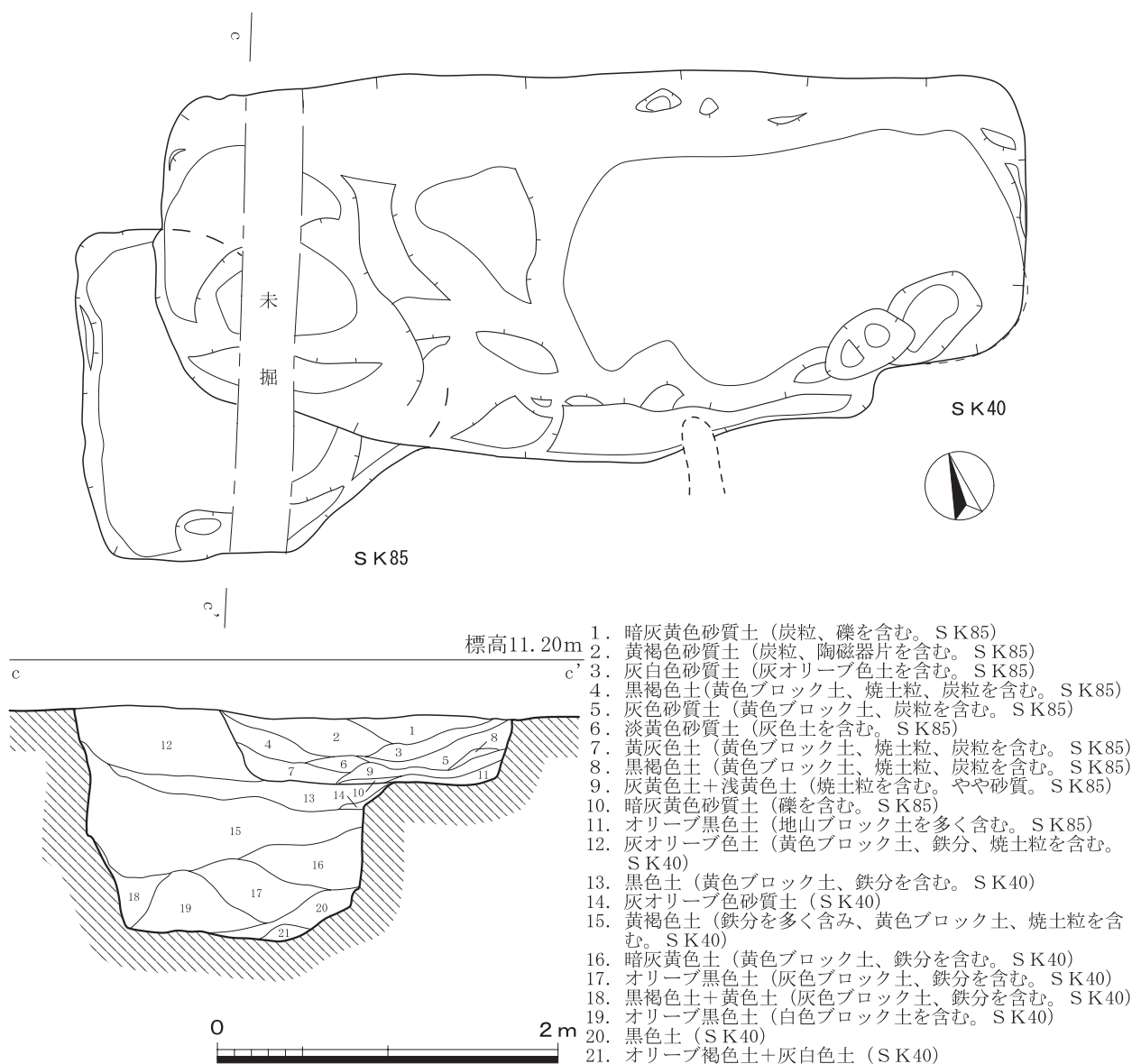
第27図 SK20実測図（1/40）

SK40（第4・7・28～29図）

調査区中央で検出した、隅丸方形の平面を有する土坑である。SD21や複数の土坑、ピットに後出してSK85に先行する。東西長5.08m、南北幅2.29m、深さは最大1.42mを測る。長軸は座標北に対して73° 西に振れる。埋土は第29図のとおりで、黒色系の土が目立ち、鉄分や焼土、炭を多く含んでいた。遺物は、近世陶磁器や土師器、銭貨や鉄釘などの金属製品、壁材が出土した。壁材は被熱しており、鉄釘も被熱が



第28図 SK40東部掘り下げ状況（北西から）

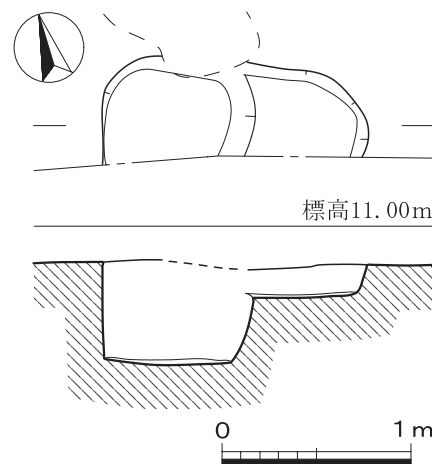


第29図 SK40・85実測図（1/40）

原因と推測される変形がみられる。出土した陶磁器の年代は17世紀に収まり、染付碗の一部のように17世紀前半にまで遡る遺物もある。

SK44（第4・7・30図）

調査区中央南端で検出した土坑である。南側は調査区外へ延びるが、東西長1.38m、南北幅0.58m以上、深さ0.57mを測る。土坑の主軸は座標北に対して24°西に振れる。ピット1基が先行しており、SD41などが後出する。埋土はにぶい褐色だった。遺物は陶磁器や土師器皿、煙管の吸口が出土したが、細片が多く量も少ない。播鉢口縁部の年代から、17世紀後半に埋没したと推測される。



第30図 SK44実測図（1/40）

S K85 (第4・7・29図)

調査区中央で検出した土坑である。土層観察からS K40に後出するが、S K40を先に掘り下げてしまったため、平面形や東西長は明らかでない。土層から、南北長1.8m、深さ0.42mを測る。埋土は第29図のとおりであり、砂質土が大半を占め、焼土粒や炭粒を含む。遺物は、陶磁器や土師器皿、鉄片や銅片、炭化材が出土した。陶磁器の年代は18世紀前半に収まる。

不明遺構

S X30 (第4・7・31～33図)

調査区中央部南側で、2基のピットを検出した。土層から、柱痕と掘方を明確に確認できる。掘方はいずれも円形の平面を有しており、直径0.45～0.55m、深さは0.28～0.57mを測る。柱痕は直径0.09～0.2mを測り、深さは0.45mである。P1・P2ともに単独で検出した。遺物は、P1からは一切出土せず、P2の柱痕から土師器の細片2個と軽石片が1個出土したのみである。

出土遺物に乏しく前後する遺構が無いため、遺構の具体的な年代は決めがたい。柱痕の間は0.47mしかなく、2基のピット以外に連続するピットが見当たらないことから、柵列や掘立柱建物とは考えにくい。柱痕に対して掘方が大きく、侍屋敷の地割と平行に並ぶことから、簡易な門状遺構とも推定できるが、確証に欠ける。従って、年代・用途ともに不明の遺構と言わざるを得ない。



第31図 S X30 P1 土層 (北西から)



第32図 S X30 P2 土層 (北西から)



第33図 S X30土層図 (1/40)

3. 出土遺物 (第34～37図、第1～2表)

合計でパンコンテナー12箱分の遺物が出土した。ごくわずかな古代の須恵器や中世陶磁器の細片を除けば、近世の土師器・瓦器・陶磁器・瓦が大半を占める。個々の法量や調整、年代などの詳細については、出土遺物観察表を参照願いたい。

【遺物観察表の凡例】〔 〕は復元値を、()は残存値を、-は欠損または該当する部位が無いことを示す。

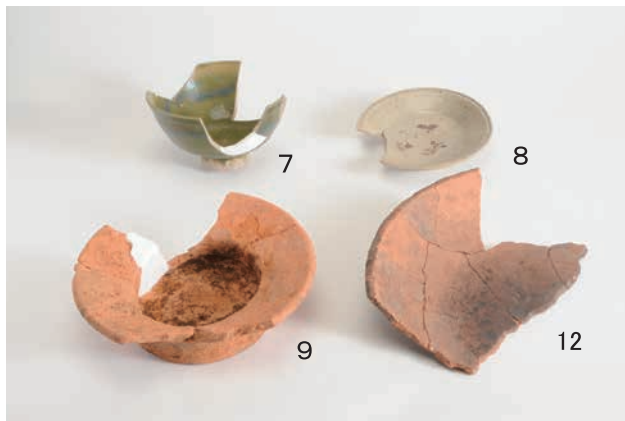
登録番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

第1表 出土遺物観察表 1

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量 (cm)			絵付 釉薬	装 飾 ・ 調 整			底面・高台 内印銘等	特徴	製作地・胎土 重量	年代・備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)		外面	内面	見込み					
1 第34図	S B54 (S P62)	磁器	大皿	—	—	(4.5)	染付	一部露胎	唐草	円圈・竹 鹿?	砂目		禅門谷窯	1630～1640	201411 000190
2 第34図	S B54 (S P62)	陶器	皿	12.9	4.7	3.1～3.9	透明釉	回転ナデ	ハケ目	砂目	砂目			17 c 後半	201411 000191
3 第34図	S K50	磁器	碗	[12.4]	[5.6]	(6.7～ 7.1)	染付	流水 円圈		不明			灰白色 微砂粒	1650～1670	201411 000171
4 第34図	S K50	磁器	小碗	6.7～6.8	3.2	4.6～4.8	染付	松 流水			「大明年製」		白色 精良	1680～1700	201411 000169
5 第34図	S K50	磁器	鉢	—	8.2	(4.0)	染付	不明		花卉	誉		白色 微砂粒	1650～1670	201411 000172
6 第34図	S K50	磁器	小碗	[7.6]	[3.0]	3.6	白磁	花唐草				線刻あり	白色 精良		201411 000170
7 第34図	S K50	陶器	碗	11.9	4.2～4.3	6.7～7.1	銅緑釉	一部露胎			高台内無釉		灰白色 精良	1650～1690	201411 000174
8 第34図	S K50	陶器	小皿	11.8	4.2	2.7	灰釉	一部露胎		目跡4ヶ所	目跡4ヶ所	溝縁皿	微砂粒	1650～1690	201411 000175
9 第34図	S K50	土師器	唾壺カ	17.2	10.8	5.3～5.5	—	回転ナデ ハケ目	回転ナデ ハケ目	ナデ	ハケ目 ナデ		細砂粒(長石・ 石英・雲母・角閃石)		201411 000178
10 第34図	S K51	磁器	碗	—	4.7	(4.3)	染付			花卉	—		白色 精良	1630～1650	201411 000180
11 第34図	S K51	磁器	碗	[9.2]	[5.6]	6.0	色絵	花卉?			—	筒型碗 被熱	白色 精良	1630～1650	201411 000181
12 第34図	S K51	土師器	焙烙	[26.0]	[16.0]	(4.8～ 5.2)	—	ハケ目	ハケ目	ハケ目	ハケ目	煤付着	砂粒(金雲母(多)・ 長石・石英)		201411 000183
13 第34図	S K51	石製品	怪石	12.4	10.5	4.7	—	凸レンズ状 に整形	—	—	—				201411 000187
14 第34図	S D21	磁器	小皿	15.0	9.3	4.8～4.9	染付	唐草 ○×	花唐草	松竹梅	「成化年製」	蛇の目凹形高台 輪花	白色 精良	19 c 前	201411 000118
15 第34図	S D35	磁器	紅皿	7.1	2.7	3.3～3.6	染付	「化粧屋に平 小町…」			砂付着		白色 微砂粒	1740～1820	201411 000123
16 第34図	S D35	陶器	碗	7.8～9.3	3.9	5.2～5.3	褐釉						小石原系 上の原産	18 c	201411 000124
17 第34図	S E39	土師器	灯明皿	6.9～7.0	3.5	1.6～1.7	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り	油煙付着	微砂粒(雲母・ 石英・長石)		201411 000130
18 第35図	S K 2	磁器	蓋物	[12.8]	7.7	6.7～6.8	染付	二重円圈 牡丹				口縁露胎	白色 精良	1690～1780	201411 000002
19 第35図	S K 2	磁器	碗蓋	10.2	4.4 (摘径)	3.1～3.3	染付	雪輪・蓮弁	四方襷	源氏香文			白色 精良	1780～1810	201411 000008
20 第35図	S K 2	磁器	碗蓋	10.2	4.3 (摘径)	3.0～3.1	染付	雪輪・蓮弁	四方襷	源氏香文			白色 精良	1780～1810	201411 000007
21 第35図	S K 2	磁器	碗蓋	9.1	3.9 (摘径)	2.8～2.9	染付	菊花・格子	円圈	円圈 「寿」			白色 精良	1780～1810	201411 000011
22 第35図	S K 2	陶器	土瓶	9.5～9.7	8.0	13.3	褐釉	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ 露胎	ナデ 露胎	ヘラケズリ 三脚?	外面底部 露胎・煤付着	微砂粒 (長石・雲母)	18 c 中～	201411 000006
23 第35図	S K 2	陶器	灯明皿	7.9～8.0	3.8～4.0	1.4～1.7	褐釉	回転ナデ 一部露胎			糸切り		微砂粒(長石)	1690～	201411 000009
24 第35図	S K 2	土師器	灯明皿	[10.4]	5.8	1.7～1.8	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り →ナデ	油煙付着	精良(雲母・ 長石・角閃石)	内壺土器	201411 000010
25 第35図	S K 3	磁器	碗	8.3	4.0	6.7	色絵 染付	藤・家屋・ ○×	四方襷	円圈 五弁花		筒型碗	白色 精良	1740～1810	201411 000030
26 第35図	S K 3	磁器	碗	9.8～9.9	4.0	4.6～4.7	染付	松竹梅					白色 精良	1710～1760	201411 000023
27 第35図	S K 3	磁器	碗	8.6	3.9	6.1	染付	蘇鉄・欄干 三角	四方襷	円圈 五弁花		筒型碗	白色 精良	1740～1810	201411 000021
28 第35図	S K 3	磁器	猪口	5.3	3.1	3.4～3.5	染付	増垣・蝶					白色 精良	18 c	201411 000024
29 第35図	S K 3	磁器	碗	10.0～ 10.1	4.4	6.4～6.5	白磁						白色 精良	1700～1750	201411 000022
30 第35図	S K 3	陶器	碗	9.2	4.3	5.1～5.2	黒釉					把手付く	微砂粒(長石)		201411 000031
31 第35図	S K 3	陶器	碗	10.7	4.2	4.2	鉄絵			山水	ヘラケズリ 露胎		灰白色 精良		201411 000025
32 第35図	S K 3	陶器	碗	[8.8]	3.1	5.7～5.8	色絵	梅			ヘラケズリ 露胎	丸碗	精良		201411 000015
33 第35図	S K 3	陶器	花生	[6.4]	6.2	16.4	鉄絵	ハケ目	回転ナデ	回転ナデ	砂付着		微砂粒		201411 000026
34 第35図	S K 3	土師器	焼塩壺カ	4.0	5.0	6.4	—	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	糸切り		微砂粒 (雲母・石英)		201411 000019
35 第35図	S K 3	土師器	灯明皿	6.6～7.0	3.8	1.1～1.4	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り	油煙付着	微砂粒(石英・長石・ 雲母・赤色粒子)		201411 000029
36 第35図	S K 3	土師器	灯明皿	6.5～6.8	3.1～3.4	1.6～1.8	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り	油煙付着	微砂粒 (雲母・赤色粒子)		201411 000016
37 第35図	S K 3	土師器	灯明皿	6.8～6.9	3.4	1.6～1.9	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り	油煙付着	微砂粒(石英・ 長石・赤色粒子)		201411 000018
38 第35図	S K 3	土師器	灯明皿	7.0～7.2	3.6～4.0	1.7～1.8	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り	油煙付着	微砂粒(石英・ 雲母・赤色粒子)		201411 000017
39 第35図	S K 3	土師器	小皿	6.8	3.9	1.5～1.6	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り		微砂粒 (雲母・赤色粒子)		201411 000013
40 第35図	S K 3	土師器	小皿	—	[6.6]	(0.8)	—	回転ナデ	回転ナデ	鶴・亀 松竹	糸切り →ナデ	内面 型押し	精良 (雲母・長石)	内壺土器 献上盃	201411 000014
41 第35図	S K12	磁器	小皿	4.8	2.4	1.4～1.5	白磁				砂付着		白色 精良		201411 000067
42 第35図	S K12	磁器	小皿	8.1～8.4	4.0	2.1～2.4	白磁		内面型打ち 菊花	ハリ跡		輪花	白色 精良	19 c 前	201411 000066
43 第35図	S K12	磁器	紅皿	6.4	2.6	1.6～1.9	白磁	型押し 蛸唐草					白色 精良	19 c 中～	201411 000068
44 第35図	S K12	磁器	紅皿	5.9～6.3	2.3	1.2～1.6	白磁	型押し 蛸唐草				外面露胎	白色 精良	19 c 中～	201411 000069
45 第36図	S K13	磁器	碗	[8.4]	3.4	3.9～4.0	色絵	草花		桜花			白色 精良	1710～1740	201411 000070

第2表 出土遺物観察表 2

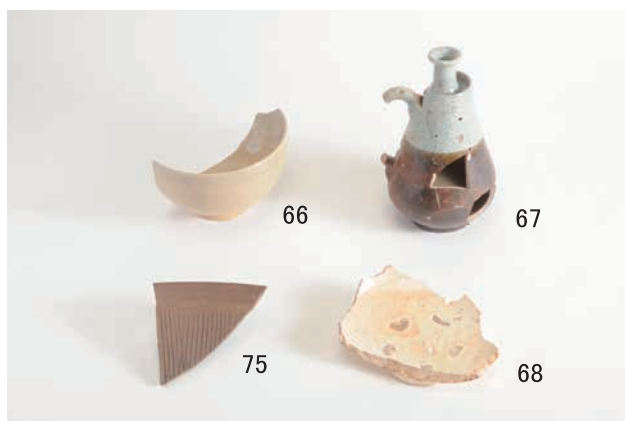
遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量 (cm)			絵付 釉薬	装 飾 ・ 調 整			底面・高台 内印銘等	特徴	製作地・胎土 重量	年代・備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)		外面	内面	見込み					
46 第36図	S K17	磁器	碗	9.9	4.1	5.7～5.8	色絵	鶯・燕 梅・烏龍		五弁花			白色 精良	1770～1810	201411 000095
47 第36図	S K17	磁器	碗	9.9	—	(4.7)	色絵	菊・巴 唐草				外面型打ち	白色 精良	被熱	201411 000110
48 第36図	S K17	磁器	蓋物	6.8	—	2.1	色絵	三つ葉		花・蝶・扇 (天井部)		口縁内面露胎	白色 精良	被熱	201411 000090
49 第36図	S K17	磁器	碗	10.2	4.0	5.8～6.0	染付	竹・鳥			円圈 「九朋年製」		白色 精良		201411 000072
50 第36図	S K17	磁器	小碗	8.1	3.1	3.8～4.0	染付	草花 円圈					灰白色 精良		201411 000071
51 第36図	S K17	磁器	碗	[14.8]	[5.6]	7.0～7.2	染付	葉		草花	円圈 「宣〇年〇」		白色 精良		201411 000073
52 第36図	S K17	磁器	碗	10.2	4.0	5.4	染付	人物 草・雲			円圈		白色 精良	18～19 c 初 被熱	201411 000106
53 第36図	S K17	磁器	段重	10.8	6.6	8.2～8.3	染付	花唐草			砂付着	口縁露胎	白色 精良	18 c	201411 000109
54 第36図	S K17	磁器	皿	[13.6]	[8.2]	2.7～2.8	染付	唐草		幾何	円圈	コンニャク判	白色 精良	18 c	201411 000094
55 第36図	S K17	磁器	皿	—	—	6.2	染付	円圈	不明	花	円圈		白色 精良	被熱 18 c	201411 000107
56 第36図	S K17	瓦	軒丸瓦	(7.7)	(12.0)	4.0	—	ヘラケズリ ナデ・型押	ヘラケズリ ナデ	—	—		細砂粒 (雲母・石英)	被熱	201411 000086
57 第36図	S K17	土師器	焙烙	[35.0]	[28.0]	4.9～5.1	—	ハケ目	回転ナデ	ハケ目	ハケ目		砂粒(金雲母(多) ・長石・石英)		201411 000112
58 第36図	S K17	土製品	壁材	(10.5)	(6.0)	(3.5)	—	ナデ	—	—	—		細砂粒 (雲母・石英)	被熱	201411 000081
59 第36図	S K17	石製品	石臼	—	[30.0]	(4.4)	—	工具痕	挽き目	—	—			被熱	201411 000088
60 第36図	S K20	磁器	碗	—	3.3	(5.8)	染付	若松		円圈 源氏香文			白色 精良	1770～1810	201411 000114
61 第36図	S K20	磁器	小皿	5.8	2.8	1.6～1.8	白磁						白色 精良		201411 000115
62 第36図	S K40	磁器	碗	[8.4]	3.5	5.0	染付	山水		砂目			白色 精良	1630～1650	201411 000139
63 第36図	S K40	磁器	碗	10.0	4.1	5.7～5.8	白磁						白色 精良	1650～1670	201411 000148
64 第36図	S K40	磁器	合子	6.5	2.7～2.8	2.2	白磁					口縁露胎	白色 精良		201411 000149
65 第36図	S K40	磁器	合子	5.3	3.4	2.6	白磁				ヘラ切り 露胎	口縁露胎	白色 精良		201411 000150
66 第36図	S K40	陶器	碗	[11.2]	4.4～4.5	(6.9～ 7.0)	透明釉				砂目4ヶ所		精良		201411 000151
67 第36図	S K40	陶器	油差し	2.4	5.0	13.7	透明釉 褐釉	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ 露胎	回転ナデ 露胎	砂付着	把手付く	微砂粒	1650～1670	201411 000147
68 第36図	S K40	陶器	皿	—	4.7～4.8	(3.0)	透明釉			目跡5ヶ所	目跡5ヶ所		精良	17 c 前	201411 000140
69 第36図	S K40	土師器	灯明皿	8.2～8.4	3.8～4.0	1.8～2.0	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り	油煙付着	精良 (石英・雲母)		201411 000152
70 第36図	S K40	土師器	灯明皿	9.0	5.2	2.2～2.3	—	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	油煙付着	微砂粒(長石・石英・ 雲母・赤色粒子)		201411 000141
71 第36図	S K40	土師器	灯明皿	9.1	4.5～4.6	1.8～2.0	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り	僅かに 油煙付着	精良(雲母・石英)		201411 000142
72 第36図	S K40	土師器	小皿	8.8	4.4	1.6～1.8	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り	外面に紐跡	精良(石英)		201411 000155
73 第36図	S K40	土製品	壁材	(7.3)	(5.3)	1.9	—	ナデ	—	—	—		細砂粒 (長石・石英)	被熱	201411 000143
74 第36図	S K40	土製品	壁材	(8.4)	(6.0)	2.1	—	ナデ	—	—	—		細砂粒(雲母・ 長石・石英)	被熱	201411 000134
75 第36図	S K44	陶器	播鉢	—	—	(5.7)	褐釉	回転ナデ	播り目	—	—			17 c 後半	201411 000166
76 第37図	S K85	陶器	碗	[11.2]	[4.8]	(6.4～ 6.5)	透明釉	—	—	—		高台に 油煙付着	微砂粒	18 c	201411 000194
77 第37図	S K85	土師器	小皿	8.2	4.5	1.5～1.7	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り		精良(雲母・石英)		201411 000196
78 第37図	S K85	土師器	小皿	7.9	3.5	1.6～1.8	—	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り		精良(雲母・石英)		201411 000197
79 第37図	S P73	陶器	瓶	—	[8.0]	(19.1)	褐釉	ハケ目	回転ナデ 露胎	回転ナデ	砂付着	胴部最大径 17.3cm	微砂粒	17 c 後半	201411 000193
80 第37図	S K17	銅製品	煙管	5.4	1.5	1.0	—	—	—	—	—	雁首	(6.3) g	羅字残る 17 c	201411 000104
81 第37図	S K51	銅製品	煙管	(4.5)	(2.4)	1.0	—	—	—	—	—	雁首	(3.7) g	17 c 前半	201411 000185
82 第37図	S K51	銅製品	煙管	(3.5)	(0.9)	(1.0)	—	—	—	—	—	吸口	(0.8) g	17 c	201411 000219
83 第37図	S K17	銭貨	寛永通宝	2.4	2.4	0.15	—	—	—	—	—	古寛永	(1.4) g		201411 000084
84 第37図	S K17	銭貨	寛永通宝	2.4	2.4	0.15	—	—	—	—	—	古寛永	2.0 g		201411 000087
85 第37図	S K17	銭貨	寛永通宝	2.4	2.4	0.15	—	—	—	—	—	古寛永	2.5 g		201411 000099
86 第37図	S K17	銭貨	寛永通宝	2.4	2.4	0.15	—	—	—	—	—	古寛永	2.3 g		201411 000105
87 第37図	S K40	銭貨	寛永通宝	2.4	2.4	0.15	—	—	—	—	—	古寛永	2.2 g		201411 000137
88 第37図	S K40	銭貨	寛永通宝	2.4	2.4	0.15	—	—	—	—	—	古寛永	(1.7) g		201411 000157
89 第37図	S K42	銭貨	寛永通宝	2.4	2.4	0.15	—	—	—	—	—	古寛永	1.5 g		201411 000158
90 第37図	S K50 検出時	銭貨	寛永通宝	2.3	2.3	0.1	—	—	—	—	—	新寛永	2.3 g		201411 000168



第34図 出土遺物写真 1



第35図 出土遺物写真 2



第36図 出土遺物写真 3



第37図 出土遺物写真4

IV. 総括

1. 屋敷の土地利用

検出した遺構を元に、屋敷内の土地利用について復元を試みる。道路に近い屋敷西部には、17世紀の建物S B 54・55が位置する。S B 55には栗石S P 71が後出しており、壁面土層にも栗石が観察できることから、この場所には幕末にも建物があつたことが窺える。屋敷中央から東部には、溝S D 21・41や井戸S E 29、廃棄土坑群があり、屋敷裏手の空閑地、特にゴミ捨て場などとして用いられていたと考えられる。屋敷の建物の裏手に井戸や廃棄土坑を有する空閑地があるという屋敷の配置は、櫛原侍屋敷遺跡第15次調査(注1)でも確認されている。なお、S D 35は標高が低くなる南へ向かって深くなることから、屋敷の中央を走る排水溝だった可能性がある。

2. 廃棄土坑について

S K 2・17・40は埋土に焼土や炭を大量に含み、S K 50・85は砂質土の層を挟む。また、S K 2・3・17・40からは、被熱した陶磁器や瓦、壁材片、炭化木などが出土した。これらから、S K 2・3・17・40・50・85は、火災後に瓦礫や消火に用いた真砂土などを廃棄して埋没したと考えられる。

ここで、それぞれの土坑はいつの火災によって生じたかが問題になる。十間屋敷の火災は、十間屋敷を含む城下一面が灰燼に帰した元禄9年(1696)2月8日の白石火事をはじめ、享保11年(1726)

3月4日（田代火事）と文政11年（1828）8月9日（岡部火事）、天保10年（1839）3月2日の火事が記録に残っている。各遺構で出土した遺物の年代をみると、S K 40・50は17世紀に、S K 85は18世紀前半に収まる。S K 17は19世紀初頭の埋没が想定され、S K 2・3の出土遺物は18世紀末から19世紀初頭に年代が集中する。このことから、まずS K 40・50は白石火事による廃棄土坑と推定される。S K 85は田代火事による廃棄土坑であると考えられ、S K 17とS K 3は遺構の前後関係から、前者が岡部火事、後者が天保10年の火事による廃棄土坑だと推測される。S K 2に関しても、このどちらかの火事によるものと思われる。

なお、これらの廃棄土坑の内、S K 50は平面形が整然とした長方形を成しており、壁面もほぼ垂直になっていることから、元々穴蔵として用いられていた土坑を火災後の後片付けの際に廃棄土坑として転用したと考えられる。櫛原侍屋敷遺跡第15次調査では、掘立柱建物の床下にあたる場所で同時期の穴蔵が検出されており（注1）、S K 50もS B 54・55の床下に設けられた穴蔵であった可能性が高い。

3. 屋敷の主について ― 郡氏を中心に

本調査地点は、『延寶八年久留米市街図』（1680）では元橋宗内の屋敷とあるが、元橋氏は略系譜などに記載が無く、詳細は明らかでない。『元禄十四年製之古図』（注2）では高橋弥三エ門の屋敷とある。高橋氏は、久留米で召し抱えられた高橋瀬兵衛を祖としており、『御家中略系譜』（篠山神社所蔵「篠山神社文庫」256）には瀬兵衛の弟として弥惣右衛門の名が見える。『御家中略系譜』には、弥惣右衛門の家系は「在別系」とあるが欠落しており、その詳細は不明である。

『天保年間久留米城下図』では屋敷の主が郡氏に代わっており、廃藩まで一貫して郡氏の屋敷であった。『御家中略系譜』（「篠山神社文庫」258）によると、郡氏は摂津国多田郡五荷庄の城主であった郡左京亮にルーツを辿れる。左京亮の子である主馬は豊臣秀頼のもとで旗奉行を務め、大坂夏の陣で討死した。主馬の子太兵衛は、豊氏が丹波国福知山藩主だった際に鉄砲頭300石で召し抱えられ、久留米転封時には300石に加えて加恩の300石と鉄砲知行地400石を合わせて1,000石が与えられている。太兵衛の長男である久太郎は、600石で家督を継いだ。久太郎は島原の乱に出陣したが、明正15年（1638）の元旦総攻撃で負傷して、無嫡子のまま死去してしまった。そこで、久太郎の弟で太兵衛の次男である万兵衛が久太郎に代わり200石で召し抱えられた。

『安政二年改舊廓図』（1855）で屋敷の主になっている兵太夫は、万兵衛から数えて5代目にあたると。兵太夫は文政3年（1820）に家督を継ぎ、御馬廻役に任じられた後、同4年（1821）、同8年（1825）、天保8年（1837）に今寺御番所定番を務めた。この頃の兵太夫は武芸に励んでおり、天保15年（1844）には武術出精により銀子1枚を拝領した。弘化3年（1846）『手鑑』では、馬廻組四番組と御城番に名が見え、御城番には「天寅十一」に就任したとある。弘化5年（1848）には再び御城番に任じられた。文久2年（1862）正月27日、兵太夫の長年の勤続に対して銀1枚が与えられた。同じ日、兵太夫は家督を長男の利勝に譲って隠居し、翌3年（1863）10月15日に病死している（注3）。

- (注1) 久留米市教育委員会 『櫛原侍屋敷遺跡 一第15次発掘調査報告-』久留米市文化財調査報告書第312集 平成24年
- (注2) 『元禄十四年製之古図』は、戸田乾吉『久留米小史』巻之一(明治27年、1894)に所収されている元禄14年(1701)の城下図の写しだが、二ノ丸に有馬豊前屋敷があることから、延宝5年(1677)以前に作成されたという指摘がある(久留米市教育委員会『三本松町遺跡』久留米市文化財調査報告書第74集 平成4年)。また、『御家中略系譜』には高橋瀬兵衛の家督を継いだ安左衛門が貞享2年(1685)に病死したという記述があるが、『元禄十四年製之古図』では安左衛門(安左エ門)が外郭祇園丁筋北西側の屋敷の主になっている(久留米市教育委員会『久留米城外郭遺跡 第7次調査』久留米市文化財調査報告書第187集 平成15年)。このことから、『元禄十四年製之古図』が作成されたのは少なくとも安左衛門が病死する貞享2年以前だと考えられる。
- (注3) この項の執筆にあたり、当課の穴井綾香の協力と教示を得た。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	じっけんやしきいせき ーだい4じはつくつちょうさほうこくー
書 名	十間屋敷遺跡 ー第4次発掘調査報告ー
シ リ ー ズ 名	久留米市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第363集
編 著 者 名	西 拓巳(編)・古賀 和子
編 集 機 関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9714 E-mail : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発 行 年 月 日	2015(平成27)年12月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
じっけんやしきいせき 十間屋敷遺跡 第4次調査	くるめし 久留米市 ひよしまち 日吉町 74-1 外	40203	—	33° 18′ 56″	130° 30′ 56″	2014. 10. 14 ゝ 2014. 12. 11	231 m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
十間屋敷遺跡 第4次調査	集落	近世	掘立柱建物	2棟	近世陶磁器、土師器、 瓦器、瓦、鉄製品、 銅製品		17 世紀の建物跡 と土坑を検出。	
			溝状遺構	3条				
			井戸	1基				
			土坑	11基				
			不明遺構	1条				
要 約								
本調査地点は筑後川左岸の低位段丘上に位置し、有馬豊氏が整備した侍屋敷の一つである「十間屋敷」の一角にあたる。遺構として、17 世紀代の掘立柱建物と廃棄土坑があり、後者は城下一面が灰燼に帰した白石火事（元禄9 年（1696）2 月 8 日）による廃棄の痕跡と考えられる。このほかにも、調査区東部に廃棄土坑が集中することから、屋敷の建物裏手に空閑地が存在したことが推定される。								
土木工事の届出日	平成 26 年 9 月 24 日			遺物の発見通知日			平成 26 年 12 月 15 日 (26 文財第 1050 号)	

十間屋敷遺跡

―第4次発掘調査報告―

久留米市文化財調査報告書 第363集

平成27年12月25日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 中村印刷有限会社

〒830-0048 久留米市梅満町972